

# アタッチメント投影刺激画の作成と 大学・短大生の反応傾向

北 川 恵

(平成19年10月1日受理 最終原稿平成19年12月5日受理)

本研究は、筆者がアタッチメントの投影的測定方法として開発した親子状況ピクチャー (PARS; 久保, 2000) の刺激画に、欧米のアタッチメント投影測度やアタッチメント理論に照らして再検討し必要な修正を加えたPARS改訂版の刺激画作成過程について報告するものであった。またPARS改訂版を大学・短大生104名 (男性28名、女性76名) に実施した結果から、各刺激画への反応傾向を、作成された物語における要求やストレスの質や程度という観点で検討することであった。刺激場面は、親のそばにいたい、否定的感情 (痛み、混乱、恐怖) を整えて欲しいといったアタッチメント要求と、探索を見守って欲しいという安全基地要求とからなっていた。要求やストレスの表出の有無、表出の強弱、あるいは独特の少数反応といった個人差と、アタッチメントに関する内的ワーキングモデルとの関連を検討することが今後の課題となった。

**キーワード:** アタッチメント、内的ワーキングモデル、投影法、親子状況ピクチャー (PARS)、刺激画

## 1. 問題と目的

本研究は、アタッチメントの個人差を、投影刺激画への物語作成反応から分析する新たな測定法を開発しようとする基礎的研究の一部である。アタッチメント対象との具体的・主観的な体験を通して構築された表象モデルによって、出来事の知覚・未来の予想・行動の計画がなされるという「内的ワーキングモデル (以下、IWM)」の考え方は、情緒的対人情報処理の個人差理解のための有効な枠組みを与えてくれる。実証研究のためには、測定方法の開発が重要な問題となる。研究の全体構想は、アタッチメントの投影的測度を開発し、児童期から成人期にかけての分析方法を標準化することである。

投影的手法によるアタッチメント測定の意義・成果・課題については、北川 (2006) がすでに述べているが、とりわけ、こうした測度については、刺激画の刺激価値の吟味が必要課題である。アタッチメントに関するIWMを活性化させるためには、ネガティブな情動状態を喚起するようなストレス場面であることが必要であろう。欧米の先行的な試みとして、アタッチメント対象との分離は強いアタッチメント要求を引き起こすとの考えに基づき、最初は分離不安テスト (以下、SAT) を用いた研究がなされてきた。SATの刺激画はすべて分離場面からなっ

ており、分離の強度が段階的に強くなるように刺激画を配列したり、あるいは、ストレスの強弱交互の順に配列した上で、ストレスの強い刺激画のみを分析に用いたりなど、用いる刺激画の種類、呈示順序、分析に用いる刺激画の選択、分析の指標や基準などが各研究で工夫や改良の途上であった。こうした一連の先行研究に基づいて開発されたAdult Attachment Projective (以下、AAP) では、分離場面のみならず、より広い文脈でアタッチメントを活性化しうる刺激画を選定している。そこで筆者が作成した親子状況ピクチャー (以下、PARS) についても、こうした欧米の知見や、アタッチメント理論との対応を今一度吟味し、刺激画に必要な修正を加えることにした。

本稿では、PARS改訂版の刺激画作成過程を述べ、各刺激画への反応傾向を述べる。特に、各刺激画が喚起した要求やストレスの程度や質を中心に反応傾向を検討する。

## 2. 方法

### 2-1. 刺激画の作成

#### (1) PARS (久保、2000) の作成過程

筆者は次のような手続きでPARS (久保、2000) の刺激画を抽出した。内在化された個人的なアタッチメント体験が投影されやすいように、まず、育児雑誌などでよく見かける親子の日常場面を広く採取した。そこから、ややストレスフルな場面を選び出した。そして、投影性の反応を喚起しうるようにあいまい効果を工夫し、シンプルで顔を輪郭線だけの絵を14場面作成した。次いで、各絵の刺激価を検討するための予備調査を行った。22名の大学生に各絵の状況と気持ち (快・不快) を問うた。その結果と父親場面・母親場面のバランスを考えながら、次の8場面を選定した。すなわち、(1) 気持ちの解釈に快・不快の個人差がみられた場面 (場面1～場面4)、(2) 不快評価が多くストレスの高い場面 (場面5, 6)、(3) 乳児のアタッチメント行動観察手法であるストレンジ・シチュエーションでは、分離と再会エピソードにアタッチメントの個人差が表れやすいとされていることに基づき、分離場面と再会場面 (場面7, 8) であった (Table 1)。

Table 1 PARS (久保、2000) の刺激画

場面1) 父親による哺乳瓶での授乳場面
場面2) 母親におんぶされ、子どもがやや顔を背けている場面
場面3) 父親とのボール遊び場面。子どもがもつボールに父が手をのばしている。
場面4) 母親とテレビをみる場面。テレビに向かって立つ子どもの腰を母が支えている。
場面5) 母親の後追い場面
場面6) 転んだ子どもに父親が歩み寄る場面
場面7) 子どもがひとりでテレビを見ている場面
場面8) 留守番していた子どもが、帰ってきた両親を玄関で迎える場面

## (2) PARS (久保、2000) における刺激画の検討

対象人数を増やしてPARSを実施したところ、次のようなことが明らかとなった。

まず、場面6は、子どもが転んでケガをするといった場面設定だけでなく、座っている子どもに親が歩み寄るといった場面設定(子どもは退屈していたり、何かを考えていたりして、大人は、子どもに誘いかけたり、ほとんど子どもと関わりがなかったり、あるいは道端に座っていることを注意したりするなど、細かい設定は多様)や、子どもが拗ねているという場面設定や、歩く練習や立つ練習といった教育的な場面設定であったりと、多様な場面解釈をし得るものであった。場面設定そのものの多様性という個人差が何を反映しているかを吟味することも興味深いのだが、あくまでアタッチメントを活性化する刺激であることが本研究の目的からは重要であると考え、この場面を除外することにした。

また、小学6年生を対象に、PARSと親子関係質問紙ならびに教師評定による対人行動チェックリストとの関連を検討した結果からは次のようなことが明らかになった。親子関係質問紙の受容性得点(「おうちの人は、あなたの話をよく聞いてくれる」、「おうちの人は、あなたが失敗したときでも励ましてくれる」など)を高く評定したものは、PARSの場面4で葛藤が低く、親主導よりも子ども主導の物語を作成することや、場面7で外界志向よりも関係志向の物語を作成することが認められた。また、場面5と場面8で、刺激画の登場人物である親が肯定的な感情のトーンを表出している場合は、そうでない場合よりも、親子関係質問紙の受容性得点が高く、非自律得点(「おうちの人は、あなたのすることにいちいち指図をする」、「おうちの人は、あなたの悪いところばかりを見て注意する」など)が低いという有意な関連あるいは関連がある傾向が認められた。また、教師評定による対人行動チェックリスト(「人の気持ちを理解しようとする」、「人の助けになろうとする」など)との関連については、PARSの場面5で、出会い場面と解釈した人(分離という苦痛を回避するかのような場面解釈)よりも、後追い場面と解釈した人(刺激画への自然な場面解釈)のほうが、この得点が高い傾向が認められた(北川・松浦、2003)。以上より、場面4, 5, 7, 8が、親子関係や対人関係の評定結果と関連していた。とりわけ、場面5, 8は、複数の尺度と関連しており、「分離」や「分離後の再会」という刺激画のテーマがアタッチメントと理論的な関連も強いいため、継続して用いることにした。

## (3) AAPにおける刺激画

George, West, & Pettem (1999) は、次のような作成過程で刺激画を選定したと述べている。

「グラフィックデザイナーの協力を得て、子ども文学、心理学教科書、写真集といった様々な出展から刺激画集を作成した。刺激画は出来事を特定するのに必要最小限の細部を描いた。性別や人種のバイアスがかからないよう注意深く描いた。刺激画は、アタッチメントに関する3つの次元を捉え得よう計画した。1つ目は、アタッチメントの活性化である。刺激画集には、病気、分離、孤独、死、脅威といった、アタッチメントを活性化することがわかっている出来事を含めた。さらに、徐々にアタッチメントシステムの活性化

が増すと考えられる順序に刺激画を提示した。2 つ目は、関係の利用可能性である。Bowlbyは、恐怖の最大の源は一人になることであると述べているため、刺激画集には、人物が一人の絵と二人の絵とを描いた。3 つ目は、年齢である。Bowlbyによるとアタッチメントは生涯重要であるため、刺激画集には子どもと大人のアタッチメント状況の両方を描いた。(以上、George et al.,1999, Pp.323-324を要約)

これらの手続きを経て選定された 8 枚の絵は次の通りである (George & West, 2003)。まず、最初の 1 枚は中立場面 (2 人の子どもがボールで遊んでいる) であり、ウォームアップ課題として使用される。アタッチメント場面は次の 7 枚である。窓辺の子ども (少女が窓の外を見ている) 出発 (スーツケースを持った大人の男女が向かい合って立っている) ベンチ (若者が一人ベンチに座っている) ベッド (子どものベッドの両端に子どもと女性が向かい合って座っている) 救急車 (担架が救急車に運び込まれるのを、年上の女性と子どもが見ている) 墓 (男性が墓の側に立っている) 角の子ども (子どもが片腕を突き出して、部屋の角に斜めに立っている)。評定はこれら 7 枚への反応に基づいてなされる。

#### (4) PARS改訂版の刺激画の作成

Georgeらの見解に基づき、PARSの刺激画を次のような観点で吟味し、修正した。

まず、被験者となる青年や成人にとってアタッチメントを活性化し得るレベルの強いストレス場面であることが必要と考えた。成人愛着面接 (以下、AAI) の質問項目においては、アタッチメント活性化場面に焦点付ける質問として、「動揺したとき、病気のと看、怪我をしたとき、両親と分離したとき、どうしたか?」という問いが含まれている。そこで、怪我 (改訂版の場面 4: 階段から落ちる)、病気 (改訂版の場面 6: 病院のベッドから母に手を伸ばす) 場面を加えた。分離場面としては、母親の後追い場面 (改訂版の場面 2 (以前は場面 5 であった刺激画)) を引き続き用いることにした。AAPでは、もっとも強いストレス場面として、「墓 (死のテーマ)」「角の子ども (虐待のテーマ)」を用いているが、そうした死や虐待を経験していない人であっても、日本人ならほとんど経験している恐怖体験として「地震場面 (改訂版の場面 7)」を最大のストレス刺激画として加えることにした。

Georgeらは、一人でいることが恐怖感情をますます大きくすると述べている。その際に、関係性を利用しようとするか否かを評定の際の着眼点にもしている。そこで、「地震場面」を「子どもが一人で地震に遭遇する場面」とすることで、ストレス価を高め、そこでの子どもの関係利用可能性を検討したいと考えた。

一方、Georgeらは、アタッチメントは生涯重要であると考え、刺激画の登場人物に子どもから大人まで含めているが、成人になってからのアタッチメント対象は必ずしも養育者ではなくなる。例えば、AAPの 出発場面 (恋人同士の分離場面) での反応は、養育者とのアタッチメント関係を通して形成されたIWMを反映していないかもしれない。そこで、PARSでは、あくまで子どもと養育者との場面に限定することにした。主たる養育者という意味では、現実的に日本文化においては、父親よりも母親がその役割を果たすことが多いため、PARS (久保、

2000)では、父親場面と母親場面と同じ数だけ設定していたが、改訂版では母親場面を父親場面より多く設けることにした。

さらに、新たな観点として、アタッチメント要求場面のみではなく、探索場面も加えることにした。具体的には、子どもが自身の興味・関心に応じて外界と関わる際に、養育者が「安全基地」として見守る関わりを提供できるのかを扱う場面として、子どもの描画を遠目に見守る母親(改訂版の場面3)を加えた。さらに、子どもからのアタッチメント要求に答えやすい場面ばかりでなく、親の意向と対立葛藤し、子どもの気持ちを調整することが親にとって容易ではないような場面として、駄々をこねる子どもとそれをもてあます母親(改訂版の場面5)を加えることにした。

刺激画の呈示順序として、最初にウォームアップ課題として、ストレス価が低い場面から始めることにした。これについては、PARS(久保、2000)の場面1(父親による哺乳瓶での授乳)を、そのまま用いることにした。これは、ミルクが欲しいという要求反応をたいてい引き起こし、それがどう満たされたかに反応の個人差があったため、日々繰り返された世話を受ける体験をめぐっての表象を活性化し得るものと考えた。これ以降の刺激画の呈示順序は、アタッチメント要求に関わる場面(場面2, 4, 6)と、新たな観点で加えた場面(場面3, 5)を交互に呈示し、場面7で最大のストレス場面を呈示した後に、場面8で子どもが両親と再会する場面とした。

以上によって、抽出された刺激画はTable 2のとおりである。

また、改訂版では、被験者が刺激場面から自由に想像を広げ、話を膨らませやすいように、刺激画のサイズを縮小し、紙の余白を広くした。

Table 2 PARS改訂版の刺激画

場面1) 父親による哺乳瓶での授乳場面*
場面2) 母親の後追い場面*
場面3) 子どもの描画を母親が遠目に見守る場面
場面4) 階段から落ちる子どもに父親が手を差し出す場面
場面5) 道端に座り込んで駄々をこねる子どもを母親が少し離れて見る場面
場面6) 病院のベッドに寝ながら子どもが母親に手を伸ばす場面
場面7) 子どもがひとりで地震に遭遇する場面
場面8) 留守番していた子どもが、帰ってきた両親を玄関で迎える場面*

注) \*は、PARS(久保、2000)と同じ刺激画

## 2 - 2 . 調査の実施

### (1) 研究協力者

大学生・短大生104名(男性28名、女性76名、平均年齢19.76歳、SD0.77)

## (2) 手続き

質問紙の表紙にある教示「次ページからの絵1枚1枚について、あなたの心や頭に浮かんだとおりに自由にお話を作ってください。絵の登場人物はそれぞれ何をしているところでしょうか？登場人物の気持ちはどうでしょうか？どんなことを考えたり思ったりしているのでしょうか？この後、登場人物はどんな行動をとり、お話のつづきはどうなるでしょうか？自由に想像して、各絵の下部になるべく詳しく記述してください」に従って、上部に刺激画が印刷され、下部に記述スペースが設けられた用紙8枚に物語反応を自由記述した。最後に、自身の作成した物語の特徴や、それと実際の親子関係や対人関係との関連を内省するための質問にも記述を求めた。氏名は無記名とし、性別と年齢のみ記述欄を設けた。

所要時間はおよそ20分から40分程度であった。質問紙回収後、研究の目的や仮説について説明した。

## 3. 結果

本稿では、アタッチメントとの関連性を高めるように意図して改定したPARSの各刺激画について、それぞれの刺激画が喚起した要求やストレスの程度や質に注目しながら、反応傾向を検討する<sup>注1)</sup>。

### (1) 場面1

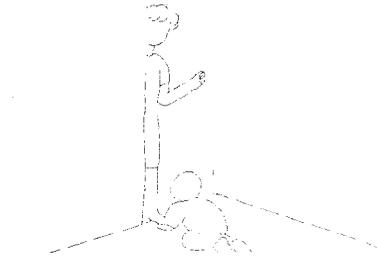


場面設定は99%が赤ちゃんにミルクを飲ませるところとしていた。子どもの気持ちとして、この場面に自然な要求である「ミルクが欲しい」という反応が59.6%と過半数であった。一方、「ミルクがおいしい」とか「お父さんにミルクを飲ませてもらって嬉しい」といった、要求表出がない反応は13.5%であった。子どもの気持ちが記述されていないものも14.4%あった。さらに、「要らない」「ミルクじゃなくてオムツ」など、この場面には強いストレス反応が4.8%あった。最終的なお話のつづきとしては、要求やストレスがなかったり治まったりする場合がほとんどであり(87.5%)、「赤ちゃんが泣き出して父がなだめる」といったようにストレスが解決しないままの結末であったのは7.7%であった<sup>注2)</sup>。

以上より、赤ちゃんが父親にミルクを欲しいと訴える要求反応が主流の刺激画であるが、まったく要求表出のない場合や、逆に、より強いストレスを喚起する場合もあった。多くが要求充足で迎える結末であったが、解決しない結末も少数あった。

### (2) 場面2

場面設定は、後追いが最も多く(59.6%)、母と子が出会う場面が31.7%であった。他に少数

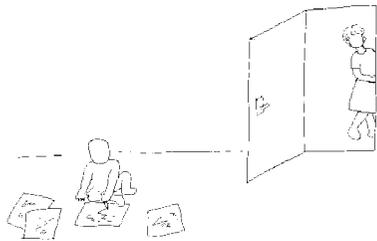


反応として、怒られているという強いストレス場面（2.9%）や、ハイハイの練習としたもの（2.9%）もいた。子どもの気持ちとしては、場面設定の違いとほぼ対応するかのように、「行かないで」「一緒に行きたい」といった分離への苦痛や抵抗が58.7%あり、「ママが来た～」などの出会えた喜びが24.0%あった。少数反応として、「置いていくなんでひどい」といった明確な怒り（3.8%）や、「何しているのかな」と

いった観察的な反応（5.8%）もあった。最終的なお話のつづきとして、要求やストレスがなかったり治まったりする場合が多く（75.3%）、親が意向を通したり、さらに事態が悪化するなど、ストレスがあるままの結末は21.1%であった。

以上より、分離をテーマとし、それへの苦痛を訴える反応が6割ほどあり、ストレスを含まない反応が3割ほどであった。強いストレスを表出する少数反応があり、最後までストレスが解決されない場合も2割ほどであった。

### (3) 場面3



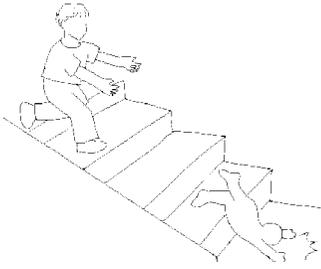
場面設定はほとんどが、お絵かきする子どもを母が見守る（98.1%）であった。子どもの気持ちは探索的活動であるお絵かきに焦点付けられたものがほとんどであり、「楽しいな」という活動への肯定的感情が53.8%、「集中している」といった中立的感情が18.3%、「つままない」といった否定的感情が7.7%であった。「後でこの絵をママに見せよう」といった関係性に方向づいた反応は9.6%であった。

母親は見守っている反応がほとんどで、「何をしているのかな」と関心を寄せたり（44.2%）、子どもの活動や成長を喜んだり（10.6%）、配慮を示したり（12.4%）が中心であった。一方「紙以外に落書きしてないかな」と心配したり（18.3%）、「床への落書きをやめさせなくては」といった拒否したり（1.9%）する場合もあった。家事など母親の行動に集中している反応もあった（4.8%）。ストレスのない結末がほとんどであり（73%）、子どもがひどい落書きをしてしまって怒られるといったストレスのある結末が23%あった。

以上より、ほとんどが子どもの探索を母親が見守る反応であるなかで、子どもの活動を安心して見守ることができない親の反応やストレスのある結末が2割ほどであった。

### (4) 場面4

場面設定は、子どもが階段から落ちるとしたものが83.7%、父親が過失・または故意に子どもを落とすとしたものが13.5%であった。子どもはほとんどが苦痛（75%）や助けを求める

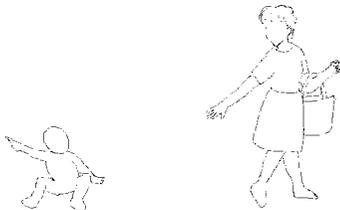


(6.7%) 表出をしている一方、気持ちが記述されていない場合(9.6%)や、「何が何だかわからない」などの中立的表現(4.8%)、「なんでそんなことするの」と落とした父親への怒り(2.9%)もあった。父親はほとんどが「大丈夫か」と応答しており(73.1%)、なかにはパニックなどの強い動揺もあった(17.3%)、少数反応として、「痛めつけてやろう」といった悪意

の反応もあった(2.9%)。結末は、「手当てをしてもらって子どもが落ち着く」といった明らかな收拾反応が過半数(56.7%)であり、「ケガをしていないか確認する」といった援助行動までが記述されている場合が28.8%、苦痛な状況が持続していたり事態が悪化したりする場合も8.7%あった。

以上より、階段から落ちるというアクシデント場面で、子どもが苦痛を訴え、親が応答して、解決するという反応が過半数であった一方、少数反応であるが、親の故意や苦痛の軽減されなさといった強いストレスを表現したものもいた。

#### (5) 場面 5



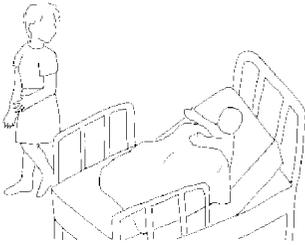
場面設定は、子どもが物を買って欲しいと駄々をこねるのがほとんどであるが(78.8%)、母親と一緒に買物に行きたい(8.7%)や抱っこをして欲しい(5.8%)といった関係要求もあった。登場人物を他人に設定するなどの独特の場面設定も4.8%あった。子どもの気持ちは「買って欲しい」と物への要求が61.5%であり、「一緒に行きたい」という関係要求が

12.5%、泣いたり(2.9%)怒ったり(16.3%)と強い感情が表出されている場合もあった。子どもの気持ちが治まる、親が譲ったり工夫したりする、子どもが自分で対処するなどして、ストレスがなくなった結末は50.0%であり、親が一方向的に子どもを連れ帰るなどのストレスが收拾しきらない結末は41.4%であった。

以上より、子どもに強い要求が表出されるのみではなく、親にとってもそれを充足することが容易ではない場面であった。

#### (6) 場面 6

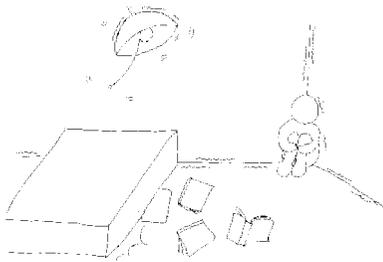
場面設定は、入院中であつたり、家での寝かしつけであつたりするものの、いずれも子どもが母親を求めている場面がほとんど(94.2%)であった。子どもの気持ちは、「一緒にいて欲しい」といった関係要求が82.7%であり、そのうち30.8%が強い寂しさを表出していた。一方「外で遊びたい」といった探索要求は10.6%であった。親の反応は様々であり、「そばにいてあげよう」「すぐに戻るからね」と子どもの要求に応じたり配慮したりする反応が37.5%、「どう



したのかしら」と関心を示す反応が12.5%、「早く眠って」などと親の意向の表明が9.6%、「寂しいのはわかるけど、行かないと」と両価的な気持ちが10.6%あった。最終的にストレスがおさまる結末は77%であった一方、ストレスを抱えた結末は17.3%であった。

以上より、必ずしも病気や入院場面とは解釈されなかったが、就寝時の分離ということで、場面2よりも強い分離ストレスを喚起した。9割が関係要求を表出する一方、1割ほどが探索要求を示した。そうした要求が満たされないままの結末も2割弱であった。

#### (7) 場面7

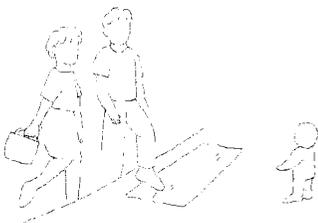


場面設定は、子どもが1人で地震に遭遇している場面がほとんど(92.3%)であったが、父親や隣人の暴力に脅えているなどといった独特の場面設定が4.8%あった。子どもの気持ちは、「ママ、パパ、早く帰ってきて」といった親を求めるものが60.6%であり、「怖い」といった否定的感情の表出が26.9%、「1人きりなので怖い」と大人を暗に求める否定的感情が

6.7%であった。「早く地震がおさまらないかなあ」といった中立的な表出は少数(1.9%)であった。最終的にストレスがない結末は65.4%(大人に助けをもらうなどが38.5%、「地震が終わるのをずっと待つ」など自力対処が26.9%)であり、「泣きながら部屋のすみにいる」など、混乱や不安を抱えたままの結末が27.9%であった。

以上より、恐怖を喚起する場面であることが明らかとなった。怖いと述べるだけでなく、関係性を要求する反応が6割(暗に求めているものを含めると7割弱)であった。恐怖が治まらない結末が3割弱あった。

#### (8) 場面8



場面設定は、両親の帰宅を子どもが迎えるという分離後の再会という解釈が75%であるのに対して、分離があったとはみなさない解釈(来客を子どもが迎えているが11.5%、これから両親と3人で外出するところが2.9%)もあった。「再婚相手を連れてくる」「子どもは人形の置物」などといった独特の設定は5.8%であった。子どもの気持ちは、「わーい、帰ってきた」などと再会を喜ぶものが46.2%、「寂しかったよ」と不安や寂しさを訴えるものが11.5%

であった一方、「やっと帰ってきた」と少し距離のある表出が15.4%、「おかえり」といった挨拶が12.5%であった。独特の場面設定にしたものに、ストレスが解決しないままの結末（「連れてきた再婚相手になつかない」など）が3.8%あった以外は、最終的にストレスが治まった結末がほとんどであった。

以上より、大多数が分離後の再会と解釈したうえで、半数弱が親との再会を喜び、1割ほどが分離の寂しさを訴え、2割強が感情の表出を抑えた反応をしていた。分離場面とはせずにストレスが最初から設定しない反応が1割強であり、一方、最後までストレスが解決しないような独特の設定をしたものも少数あった。

#### 4. 考察

刺激画から作成された物語反応の主要な傾向については、ストレスや要求の質や程度から、次のように整理できる。場面1は、ミルク要求が過半数であり、要求が充足される結末がほとんどであった。比較的満たされやすい種類のストレス場面であり、ウォームアップ課題として適切であったと思われる。場面2は、関係要求（分離への抵抗）が過半数であった。場面3は要求やストレスのない反応が中心であったが、親が安全基地として見守ってくれているからこそ、興味に向かった活動ができるわけであり、「探索を見守って欲しい要求」あるいは「見守ってくれることへの信頼や期待」が根本にあると考えられる。場面4はアクシデント場面であり、苦痛の表現や助けの要求がほとんどであった。場面5は、子どもと親の要求が対立的で、解決・收拾の有無が半々に分かれる場面であった。子どもの発言としては「物を買って欲しい」という物質要求が中心のようであるが、道端に座り込んで駄々をこねているような混乱状態で、子どもは養育者に「混乱した感情を整えて欲しい要求」が同時に高まっている場面といえる。場面6は、想定した病気場面だけでなく、寝かしつけ場面にも解釈されたが、ほとんどが関係要求（分離への抵抗）を示しており、場面2よりも強い分離ストレス場面であった。場面7は、1人での地震遭遇という強い恐怖や不安のもとで両親を求める関係要求が中心であった。場面8は分離時の寂しさや再会のうれしさといった関係性に関する感情が表出されやすい場面であった。

また、各刺激画で、もっとも標準的な反応傾向が認められた一方で、ストレスや要求の表出がない反応群や、逆に、その場面にしては強すぎるストレスを想定する反応群もいた。またごく少数ではあったが、登場人物を親子以外に設定するなどといった独特の反応も認められた。こうした差異が、アタッチメントに関するIWMと関連するのかを検討するのが今後の課題である。

PARSの開発研究の最終的な目標は、PARSへの反応からアタッチメントの個人差を測定する評価手続きを標準化することである。個人差評価基準を作成するために、反応の多様性を抽出しうる多数の反応カテゴリーを設定して評価し、これらの細かいカテゴリー間の関連性・類似性を統計的に検討しながら反応パターンを抽出するボトムアップ方式と、理論や既存のアタッチメント測度で分類されている4カテゴリー（安定自律型、回避型、とらわれ型、未解決型）

を想定して、これらに対応する指標を抽出して評定・分類するトップダウン方式とを今後検討する予定である。ボトムアップ方式についての詳細は、北川・松浦(2008)で発表予定である。今後、PARSの反応の個人差と、既存のアタッチメント測度(成人アタッチメント質問紙(日本語版ECR)や成人愛着面接(AAI))との関連を検討し、順次報告していく予定である。そのうえで、各刺激画を、アタッチメントに関する個人差を弁別しうる程度について吟味しながら取舍選択し、刺激画の選定と分析方法の確立を目指したい。

## 引用文献

- George,C., West,M., & Pettem,O. 1999 The Adult Attachment Projective: Disorganization of adult attachment at the level of representation. In Solomon,J., & George,C. (Eds.) *Attachment disorganization*. New York: Guilford Press. Pp.462-507.
- George,C., & West,M. 2003 The Adult Attachment Projective: Measuring individual differences in attachment security using projective methodology. In Hilsenroth,M.J. (Ed.) *Comprehensive Handbook of Psychological Assessment: Vol.2. Personality Assessment*. M.Hersen (Editor-in-Chief of volume series) New York: John Wiley & Sons.
- 北川恵 2006 アタッチメント測定方法としての投影法の意義・成果・課題 四天王寺国際仏教大学紀要, 41, 1-14.
- 北川恵・松浦ひろみ 2003 児童期後期における愛着表象の投影的研究～親子関係質問紙ならびに対人行動の教師評定結果との関連～ 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, p.128.
- 北川恵・松浦ひろみ 2008 アタッチメントの投影的測定方法開発に関する基礎的研究;成人データからの反応パターンの抽出 日本発達心理学会第19回大会発表論文集、印刷中.
- 久保(北川)恵 2000 愛着表象の投影法的研究 - 親子場面刺激画を用いて - 心理学研究, 70(6), 477-484.

注1) PARsの評定は、京都女子大学発達教育学部准教授の松浦ひろみ氏と共同で行っている。本稿での結果の分析は、松浦氏と共同でボトムアップ評定をした結果に基づき、各刺激画のストレスという観点から筆者が検討した内容である。

注2) 累積パーセントが100にならないのは、無記入や極めて独特の少数反応をここでは原則として述べていないためである。

本研究は、科学研究費補助金若手研究(B)(研究代表者:北川恵、平成18年度～平成20年度、課題番号:18730451)を受けて行ったものである。

刺激画作成にあたり貴重なコメントをくださった齊藤久美子先生(甲子園大学教授)、数井みゆき先生(茨城大学教授) 評定を共に行ってくださった松浦ひろみ先生(京都女子大学准教授)に、この場を借りてお礼申し上げます。

# Developing picture stimuli of the adult attachment projective method, and the tendency of story making responses of college students

Megumi KITAGAWA

**Abstract:** This study has two aims. First, I reported the process to revise picture stimuli of PARS, according to attachment theory and previous studies on adult attachment projective reported in Europe and US. Second, I examined the tendency of story making responses to PARS based on the results from 104 college students ( 28 males, 76 females ), especially from the view point of what kind and how much of distress and needs were expressed in their story making responses. It was revealed that picture stimuli facilitated such needs for attachment ( needs to be close to parents and needs for parents to regulate their negative affect like hurt, upset, and fear ) and for secure base ( needs for parents to watch over their exploration ). Further examination is needed whether such individual differences of responses to PARS ( whether needs are expressed or not, how much needs are expressed, whether responses are typical or unique ) are related to IWM of attachment.

**Key words :** attachment, internal working models, projective method, pictures of attachment related situations ( PARS ), picture stimuli